

読書推進運動

公益社団法人
読書推進運動協議会

〒162-0828
東京都新宿区袋町6
日本出版クラブ会館内

TEL 03(3260)3071
FAX 03(5229)1560

発行人 宮本 久
編集人 片岡 伸子

定価 60円

会員の購読料は
会費の中に含まれる

No.610

★「読書週間」ポスター完成!(2頁)
★追悼・小峰紀雄さん(3頁)



追悼 小峰紀雄さん

支えあう力を大切にしたい人

公益社団法人 読書推進運動協議会 会長
子どもの読書推進協議会 代表

野間省伸のまのぶ

小峰紀雄さんの突然の訃報に接し、驚いた日から3か月、いまだに信じられない思いです。

小峰さんは2000年の「子ども読書年」について、よくお話しされました。政・官・民の協力体制がどのようにできたのか、それが国立国会図書館国際子ども図書館の開館、「子どもの読書活動推進法」「子ども読書の日」制定につながり、読み聞かせ活動が格段に広がったなど、大きな成果をもたらしたことを強調されておられた姿が心に残っています。

小峰さんから子どもの読書推進会議代表を引き継いだ私にとって大きな課題は、2015年に中止となった「上野の森親子フェスタ(現・

上野の森親子ブックフェスタ)」を再開することでした。一度途切れたものを、新たな枠組みでまたはじめることは、むずかしいものです。日本児童図書出版協会、出版文化産業振興財団との話しあいでは、小峰さんより大きな協力をいただきました。そして、現在の運営委員会の設置が決まり、その運営委員長に小峰さんご自身が就任されたこと

で、2016年5月に「上野の森親子フェスタ」は再開され、フェスタを待ちわびていた子どもたち、大人たちでたいへんなにぎわいとなりました。

小峰さんみずから、各種機関・団体などを訪問して、協賛・協力をお願いされたこともあり、「上野の森親子ブッ

クフェスタ」は中止前にも増して多彩な出展者が参加し、来場者も年々増えています。子どもの読書推進会議はこれからも、小峰さんが築いてくれた3年間をもとに、「上野の森親子ブックフェスタ」のさらなる発展に力を注ぎたいと思います。

小峰さんは、読書推進運動協議会では長らく、事業委員、理事を務められ、2011年から会長として活躍されました。ちょうど公益社団法人への移行を進めていた時期であり、読書協がどうあるべきか、より深く考えておられたのでしよう。出版社、販売会社、書店、図書館などの協力で成りたち、全国の図書館、その図書館を通じてつながっている読書グループのみならず

と協力することができると進協は、「読書推進運動の岩盤なんです」とおっしゃっていました。

会長であつたとき、そしてその後も、野間読書推進賞贈呈式では受賞者のみなさんとことばを交わされ、活動を讃えておられました。これまでの受賞者の方々を贈呈式にご案内するようになったのは、小峰さんが会長になってからです。贈呈式が読書推進運動に携わる人たちの交流の場となるよう願つてのことと、聞いております。

小峰さんの社葬でいただいたリーフレットには、「仲間を支えられてやってこれたことが多かったんだ」と語る、小峰さんの姿が紹介されています。支えあう、協力しあうことをたいせつにしたその姿は、出版界・読書界の協力で設立され、今日まで続いてきた読書協と重なります。小峰さんの姿勢を継ぎ、読書協はこれからも、全国の読書に携わる人・団体と手を携えてまいります。

と協力することができると進協は、「読書推進運動の岩盤なんです」とおっしゃっていました。



ポスター完成しました！

図書館・書店・学校など、掲出にご協力ください

「2018 第72回・読書週間」のポスターが完成、9月7日より順次、発送しています。

標語・イラスト募集に応募いただいた方、選考委員、デザインを担当したプラス・アイなど、すべての関係者に感謝いたします。

ポスターは6万5千枚を製作、全国の小・中・高校、公共図書館

書店などに配布、掲出をお願いします。出版社、新聞社、テレビ局などのマスコミ関係機関にも、読書週間「趣旨書と運動普及活動の要請書」を同封して送付する予定です。

今年の標語は、「ホッと一息本と一息」です。入選者の沢田真紀さん（トーハン）は、「忙しい日

今年度の標語は、「ホッと一息本と一息」です。入選者の沢田真紀さん（トーハン）は、「忙しい日



・イラストレーション／さとうみずす
・標語／沢田真紀
・デザイン／有原文絵（プラス・アイ）

誌に告知広告掲載のお願いをいたしました。さらに、電通の協力を得て、新聞各紙やテレビ・ラジオの情報番組でも取りあげてもらおうよう企画を進めています。

現在、読書推進運動協議会ホームページ (<http://www.dokusho.or.jp>) では、ポスター・

マークのデータ、このページにも使っているロゴデータ（各種フォントあり）を配布中。図書館、書店での展示に活用いただけるポップ、しおり、ブックカバーなども掲載する予定です。

1947年（昭和22年）、まだ戦火の残る時期、「読書の力で平和な文化国家を」を目標に誕生した「読書週間」。自由を本を作り、自由に本を読めることは、平和の基礎です。その基礎をもとに、本を通じて自分とは異なる考えや文化を知り、理解する努力。SNSなどで広く自分への共感を求めつつ、自分と異なる価値観を発信する顔も知らない他者を攻撃することばに接することも増えてきたいま、あらためて「読書週間」創設時の願いを考えたいと思います

そのためには、公共・学校図書館の充実、書店の活性化などが必要です。「読書週間」がそれらの契機となることも願っています。

本年度も、日本雑誌協会の特別な協力を得て、多くの出版社の雑

追悼 小峰 紀雄さん



読書環境をつくるということ

小峰 紀雄

よるが すんでいる
ああ ほしの におい！
「シン」というまど・みちお先生の詩です。この詩に出会って、紫色のシンが、私には違ったものに見えてきました。

ありは
あんまり 小さいので
からだは ないように見える

いのちだけが はだかで
さらさらと
はたらいているように見える

ほんの そつとでも

火花が とびちりそつに：

同じく「アリ」という詩ですが、この詩は、小さな命に対する新しいまなざしを獲得させてくれるのではないのでしょうか。まだ先生の詩は、命や世界の豊かさを知らせてくれるばかりでなく、ことばを育ててくれます。

その本に出会わなかったら、私の人生はもつと違ったものになっていたろうと、記した先人がおり

ます。高度情報化社会は、ことばや思考力を壊す要素をも併せ持つており、それだけに、ことばを獲得し、思考力を深める読書が、いまさらにたいせつな意味を帯びているのではないのでしょうか。自分で考え、自分のことばで表現する個性が育つことが、民主主義にとつて欠かせない基礎でもあります。

しかしながら、子どもと若者の読書離れが進んでいることが、全国学校図書館協議会と毎日新聞社が毎年実施している「学校読書調査」でもしばしば指摘されてきました。また国際教育到達評価学会が昨年まとめた数学と理科の国際的な学力比較によれば、日本の子どもたちは、自分のことばで表現する能力は、国際平均を大きく下回ると伝えられています。

私たちの時代は、子どもたちをどこへ連れていき、どのような21世紀を手渡すつもりなのでしょう。子どもたちの読書離れを考えるとき、大人の側が、どのような本を届けてきたのか、どのような読書環境をつくってきたのかとい

うことが、まず問われなければならないと思います。さまざまな場でのさまざまな人びとによる、読書推進の努力と蓄積にもかかわらず、その読書環境は、かなり不十分であるのは周知のことです。

読書環境に関していえば、この数年、新しい流れと成果が生まれています。「子どもたちがたくさんの本と出会う」ことを目的に、書き手、作り手、渡し手が参加した「子どもと本の出会いの会」の活動、民間からの提言による国立の「国際子ども図書館」の設立、文部省の「子ども目ら学ぶ教育」という学校教育改革に基づく「学校図書館図書整備新5か年計画」と全国的な予算化運動などです。とくに「新5か年計画」は、子どもたちの読書にたいせつな意味を持つ施策であり、本年度が最終年度です。私たちは、この流れを大きく育てることが急務と考え、第2次の策定を求める「学校図書館整備推進会議」をつくりました。

それぞれの場から、ぜひとも声をあげていただきたいと思えます。文化の原義は、耕し、種をまき、育てることです。読書環境を整備していく試みが、子どもたちの時代をひらくキーワードになるに違いないと思えます。

公益社団法人 読書推進運動協議会前会長 小峰紀雄さんは、『読書推進運動』に巻頭言を5回、寄稿されました。ここに紹介したのは最初にいただいた巻頭言で、1997年2月に発行した351号に掲載されたものです。肩書きは「日本児童図書出版協会会長・小峰書店社長」で、5回のうち唯一、読書推進運動協議会の理事・会長以外の立場で書かれています。

このページを編集するにあたり、小峰さんゆかりの方々には追悼文をお願いすることも検討しましたが、巻頭言に何度も校正を入れられた小峰さんの姿を思い出すと、小峰さんご自身のことばをいま一度、そのままご紹介するのがよいと考えました。

読書推進運動協議会の理事・会長としては「読進協の成りたち」「読書週間の歴史と意義」などについてご寄稿いただいたため、ほかの巻頭言ではあまりふれられなかったご自身の読書体験や、ことばを育てる読書への希望、子どもたちへの思いが伝わってくるこの文章を再録することで、小峰さんを偲び、あらためて、いただいたご尽力に深く感謝申し上げます。

公益社団法人

読書推進運動協議会

■絵本ワールドinふくしま

人気キャラクターや絵本の作家と ふれあう参加型企画が人気！

8月11日(土)、12日(日)、福島県郡山市のビッグパレットふくしままで「絵本ワールドinふくしま2018」(主催||実行委員会)が開催された。

2000年の子ども読書年の趣旨にのっとり、2006年からスタートし、東日本大震災のあつた2011年にも休止せずに開催してきたこのイベントも連続開催13回目をむかえた。

オープニングでは毎年恒例となったキャラクターたちが大集合。コロちゃん、かいけつゾロリ、うんこダスマン、ぼくはおうさま、ティラノサウルスが子どもたちといっしょにくす玉を割り、入場にあわせて握手会や撮影会を行った。キャラクターたちは会期中、随時会場をまわり、子どもたちの人気を集めていた。

11日の児童文学作家のくすのきしげのりさんと画家の古山拓さんの講演会は、ふたりにて刊行した最新作『交響曲「第九」 歎びよ未来へ！ 板東俘虜収容所奇跡の物語』がテーマ。いまから100年前の第一



絵本ワールドinふくしま名物の人気キャラクターぞろい踏み！

次世界大戦中に、日本で最初にベートーベンの交響曲「第九」が徳島県鳴門市の板東俘虜収容所で演奏された経緯、俘虜のドイツ兵と地元の人々との交流を描いた内容や、著者や画家としてこの作品に込めた思いを、それぞれに語った。

福音館書店編集部長 上田紀人さんの講演会「絵本ができるまで」では、林明子さんの『はじめのおつかい』を題材にして、作家の着想から編集者との打ちあわせを経て作品のできあがるまでのソフト面と、印刷製本されていく



作家と画家の思いがぎゅっとつまったくすのきさん・古山さんの講演会

ハード面についてそれぞれ解説された。

12日には絵本作家の武田美穂さんの講演会と「ざわざわ森のがんこちゃん」缶バッジ作りのワークショップが行われた。いずれも講演会の後に絵本の即売サイン会が行われ、長い行列ができた。

また、「なにぬの屋」渋沢やこさんの布紙芝居、絵本作家のあさばたまみさん・かとうゆうこさんのワークシヨップ、県内ボランティア団体の読み聞かせや缶バッジ作りのイベントも行われた。

会場には「子どもの本大展示」と銘打って1万冊の絵本が展示即売され、「よい絵本」コーナーや過去の絵本ワールドのポスター展示などもあって大いににぎわった。

■『赤い鳥』創刊100年記念

『赤い鳥』創刊100年、 子どものための文学をいま、考える

今年に雑誌『赤い鳥』が創刊されて100年。全国の図書館でも関連行事が行われている。

国立国会図書館国際子ども図書館(東京都台東区)では、9月9日(日)より展示会『赤い鳥』創刊100年―誌面を彩った作品と作家たち―を開催する。『赤い鳥』と、

その誌面で活躍した北原白秋、芥川龍之介、新美南吉などの作家・詩人の作品を紹介し、また、現在までどのように読み継がれているきたかをふり返る。期間は来年1月20日(日)までで、11月11日(日)までを前期、11月13日(火)から後期と



国際子ども図書館展示会のチラシ

して展示の一部を入れ替える。入場は無料。関連イベントとして、10月21日(日)に周東美材さん(大東文化大学講師)の講演会『赤い鳥』童謡と音楽』が開催される。その他にもスタッフによるギャラリートークが予定されている。

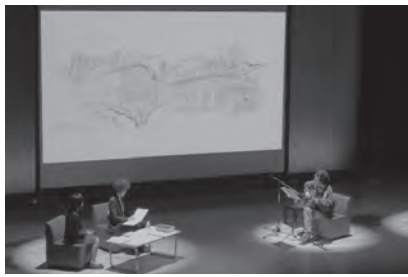
9月23日(日)には、神奈川近代文学館ホール(神奈川県横浜市中区)で、『赤い鳥』創刊100年記念事業実行委員会と神奈川近代文学館が「朗読とシンポジウムの会『赤い鳥』を語る」を開催する。プログラムは、山根基世さん(元アナウンサー)の『赤い鳥』掲載作品の朗読と、シンポジウム『赤い鳥』が目指したこと。パネリストは、

佐藤宗子さん(千葉大学教授)、松本育子さん(刈谷市美術館副館長)、矢崎節夫さん(童謡詩人・作家)で、コーディネーターは宮川健郎さん(武蔵野大学教授)。こちらの参加はチケットが必要。チケット入手方法は、神奈川近代文学館のホームページ(<http://www.kanabun.or.jp/>)をご覧ください。

■図書館からの活動レポート

子どもたちが輝く活動を目指して 小さな町の読書推進事業

秋田県羽後町立図書館館長 原田真裕美



ギターの生演奏も楽しんだ「小さな朗読コンサート」(ゲストは伊勢英子さん)

羽後町立図書館長に就任したのはいまから8年前のこと。「マスコミ関係の仕事をしている私がなぜ？」突然の依頼に戸惑いながらも、「図書館は静かで陰気なところ」「図書館職員は暇そうだ」というイメージを払拭させたい。羽後町の読書推進に少しでも役に立てればーそんな気持ちで引き受け、図書館勤務がスタートした。「さて、なにからはじめようか」思っただけが空回りしていたころ、初めて館長会議で家読推進プロジェクト代表の佐川一亮氏の講演

に心打たれ「これだ!!」と直感。羽後町に「家読(うちどく)」を広めたいという思いがこみあげてきた。早速、羽後町立図書館でも佐川氏をお招きし「第1回家読講演会」を開催。2回目以降は絵本作家をゲストに「家読講演会(絵本ライプ)」を続けている。これまで宮西達也氏、木村裕一氏、長谷川義史氏、真珠まりこ氏、川端誠氏と活躍中の絵本作家が来館している。観客のメインは町内の小学生。送迎はスクールバスを利用している。毎年300名ほどが来場し、子どもから大人まで、作者が繰り返し読める絵本の世界を楽しんでいる。私の身分は非常勤特別職であるため、これまでの仕事、ラジオのパソナリテイやナレーター、司会業なども継続している。この副業を読書推進活動に生かせないか?と思いついたのが「小さな朗読コンサート」である。当初は家読推進プロジェクト会員お薦めの本をラジオで朗読していたが、佐川氏からの提案で絵本作家に電

話インタビューしたあとで原田が朗読というプログラムを放送している。音楽担当は家読推進プロジェクト会員で佐賀県在住の羽柴よしえ氏。毎回その絵本にふさわしい曲を作曲・編曲・演奏・送信し番組を支えてくれる。一方、羽後町立図書館では毎月その絵本作家の作品を展示して紹介、そして年に一度、ライブ「小さな朗読コンサート」を開催している。これまで長野ヒデ子氏、淺沼ミキ子氏、伊勢英子氏、内田麟太郎氏、あべ弘士氏が来町。昨年度からは羽後中学校と連携して企画・実施している。前回は羽後中学校1年生が授業の一環として参加、観覧した。ゲストあべ弘士氏の作品を中学生が朗読。羽後中学校長と生徒が笛や太鼓でBGMを担当するという場面もあった。11回目となる今年は、くすのきしげの氏をゲストに10月31日に開催する予定である。

羽後町立図書館で6年前から取り組んでいるのが「羽後子ども司書養成講座」。子どもたちが司書の仕事を学び、図書館や学校、地域で活躍することを目的としている講座である。この活動は福島県矢祭町で発案され、全国的に広がってきている。羽後町での講座は、本の分類、修理、書架整理、カウンター業務、調べ学習、ポップづくり、選書、朗読講習のほか、羽後町めぐりや昔語り体験などの郷土学習も織り交ぜている。こうしたカリキュラムを規程教受講すれば、正式に「羽後子ども司書」となる。認定後は月に一度の活動日のほかに、クリスマス公演、小さな朗読コンサート、ブックフェスティバルなどに出演し、活動の場を広げている。また、ラジオ「子ども司書だより」では、羽後町だけではなく全国の子ども司書・ジュニア司書養成講座の内容や様子を放送し、情報交換している。

羽後町立図書館のもうひとつのメインイベントはブックフェスティバル。第1部は「心に残った本の感想コンクール発表」と「羽後子ども司書養成講座」の認定式。第2部は「ALTと子ども司書」といっしょに英語と日本語であそぼう」で、同会場では子ども司書が作ったポップや手作り絵本などの展示も行われる。コンクールには個人部門と家読部門があり、親子で発表するほほえましい光景も見られる。子ども司書が司会をしたり、ALTと一緒に絵本を英日で朗読したり歌ったり、活躍できるイベントである。その他、ボランティアグループによる「絵本とあそぼうの会」やブックスタートなども、子どもの読書推進に欠かせないたいせつな事業となっている。

通常の図書館業務のほかにこうした事業を6人の職員で取り組み、教育委員会や学校、地域住民と連携しながら継続している。職員や協力者の熱意やアイデア、家読推進プロジェクト、子ども司書推進プロジェクトの支援に感謝しながら、子どもたちが地域を支える読書リーダーに成長する姿を夢みて力を注いでいる。



「心に残った本の感想コンクール」発表では大型スクリーンも使用

IBBY世界大会開催

子どもの本で世界の国に橋を架ける



会場ではIBBY加盟各国の本が展示された

現地時間8月30日〜9月1日、第36回IBBY世界大会がギリシャ・アテネで開催された。今回の大会テーマは「東と西が出合うところ——子どもの本をめぐる」。

国際児童図書評議会（IBBY）に加盟する各国から、子どもの本に関わる人、関心をよせる人が多数参加し、3日にわたってさまざまな報告やワークショップ、展示が行われた。

こさんは、ポスター発表でIBBYが発行したブックレットを紹介し、日本から海外へ、海外から日本へと、優れた児童書の情報が相互に行き来することの意義について述べた。大阪国際児童文学振興財団の土居安子さんは、文化の多様性が最近の日本の絵本に与えた影響について紹介した。

31日には、国際アンデルセン賞授与式が行われ、作家賞の角野栄子さんと画家賞のイーゴリ・オレインニコフさん（ロシア）にメダルと賞状が授与された。

受賞スピーチで角野さんは、第2次世界大戦中に少女時代を過ごした自分が本によってどれだけなぐさめられ、生きる勇氣をもらったか、その大戦後に子どもの文学を通して世界の平和を願ったIBBY創設者 イエラ・レップマンの志を継ぐこの賞の受賞は特別なものであると、受賞の喜びと関係者への感謝を述べた。

今回、角野さんの受賞理由のひとつに上げられているのが、「絵本に見られる遊び心とオノマトペ



授与された国際アンデルセン賞メダルをかかげる角野栄子さん

の楽しさ」。角野さんは幼いころ、父が語ってくれた『桃太郎』の桃

が流れてくる場面のオノマトペと思い出を紹介。仕事がかどらず筆が止まってしまったときに、このオノマトペを無意識に口にしていると、「幼いときのわくわくした気持ちがよくあがって、原稿を書き進めることができたことがなにもありません。これは、私のおまじないのことばなのです。父へ向けて、またこのような豊かなことばを持つている日本語に、『ありがとう』と言いたくなります」と語った。その一方、「西洋文明の源をつくったこのギリシャにも、ここにいるみなさんのそれぞれの国にも、楽しい『オノマトペ』があるでしょう」と、各国のことばへも思いを寄せた。

優良読書グループの歩み 9

2017年度の「読書週間」に際して道府県読書推進運動協議会より推薦され、本会において表彰した全国の優良読書グループの活動報告を掲載いたします。（順不同）

青い壺読書会

代表者 道 勝美

石川県能美市

（推薦）
石川県読書推進運動協議会

青い壺読書会は1981年3月に発足した。代表者である道勝美は、それまで根上町婦人会読書グループリーダーとして、当時70名の会員の巡回図書や読書会に10年間努めたが、後進にあとをゆずり、さらに読書愛好者の裾野を広げるべく、あらたにメンバーを募り、新しい会を立ちあげた。

第1回の有吉佐和子著『青い壺』

に得るところがあり、その名をグループ名とした。28年前は会場に社会福祉会館の一室を借りて、夜7時から9時の2時間をあて、月に1回開催した。会員は7名で、会費は取らず、年1回講師を招いたときの費用はリーダーが用立てた。当時の会員はつきつきに亡く



高月町での文学散歩は、雨に映える緑が印象的な一日に

2017.06.2

たが、会員それぞれの好みで選ぶこととした。自分から進んで読まなかった本にも出会えて、幅の広い読み方ができたと思っている。一部を紹介すると、『或る男』 東山彰良、『辛い闘』 沢田ふじ子、『日本のごころ』岡潔、『スワートの男』宮本彰、『罪ひと』三島由紀夫など。

地元能美市読連協では9グループ合同で年一回、文学散策を行い、2017年度は、井上靖『星と祭』の舞台の滋賀県琵琶湖畔 高月町の十一面観音めぐり。2016年は富山市 三島由紀夫「隠文」文学館花ざかりの森、2015年は長野県上田市の「無言館」を訪ね、前後して館長窪島誠一郎氏の話聞いた。

毎月1回の例会のほか、石川県読協主催「本を読む仲間をつどい」には毎年会員が参加し、助言や司会、記録の役割分担に協力している。また、近隣の小松市、白山市

からも若い仲間が体験入会しており、新読書会結成に向けての応援もしている。朗読会やサウルハーブによる弾き語りの仲間の応援もしている。

めだか絵本の会

代表者 柿本 節子

広島県安芸郡熊野町

〈推薦〉
広島県読書推進運動協議会

本会は、2001年に熊野第三小学校読み聞かせボランティアの呼びかけに、地域に恩がえしができると有志が集まり、活動をはじめました。

当時は子どもたちへの読み聞かせや読書推進活動の重要性は認識されていたものの、町内には図書館がありませんでした。地域では公民館で読み聞かせ活動を行い、

その後、2005年に念願の町立図書館が完成し、小さな子どもたちにも身近に絵本を楽しんで読んでもらえるような活動をめざして、めだか絵本の会とグループ名をつけ、町立図書館・保育園など読み聞かせ活動の場を広げてきました。

熊野町では2012年度から、幼児から中学生まで家庭で親子が同じ本を読む読書推進活動「くまどく」事業を進めており、本会の活動がその一助にもなっています。

現在は、絵本の読み聞かせのほかにも、工作や折り紙・手遊び、季節の行事（クリスマス会など）など楽しく活動しています。おはなし会に参加する子どもたちは、

乳幼児から小学生まで幅広く、メンバーは子どもたちの成長に活動を通じて関わることに喜びを感じています。また、若い母親たち



おはなし会は参加者同士の交流の場としても人気!

から子育て相談をされることもあり、参加者同士の交流の場にもなっています。

町立図書館の図書館まつりでのおはなし会を継続し、近年では読み聞かせに音楽を交えたおはなし会を行っています。おはなしの雰囲気にあわせた音楽の選曲や、おはなしの間に音楽を入れるタイミ

ングなどをみんなで話しあい、「子ども司書」の踊りもあり、いつもとは違うスペシャルなおはなし会は、まつりの参加者に大変好評です。

本会が長年活動を続けることができたのは、グループ員が参加できるときに、無理なく楽しみながら活動をするというスタンスで取り組み、読み聞かせを楽しみにくる子どもたちのたくさん笑顔に励まされてきたためです。いまでは町内で、小さな子どもから小学生にまで、絵本のおぼちゃん!!と声をかけられることもしばしばです。

近年はグループ員の高齢化が進み、この活動を継承していく人が少なくなっています。どのように若い世代に子どもたちへの読書推進のたいせつさを認識してもらい、活動をバトンタッチしていくかが、これからの課題です。

ホッと息本と息

2018・第72回 読書週間

10月27日～11月9日



公益社団法人 読書推進運動協議会 事務所移転のお知らせ

公益社団法人 読書推進運動協議会は、2018年10月に事務所を移転いたします。

創設当初から事務所を構えた神楽坂をあとにし、移転する先は本の街・神田神保町。神保町駅・神保町交差点のほど近くに、この8月に竣工した出版クラブビルが新しい事務所となります。出版クラブビルエントランスには、吹き抜けの天井まで届く書架が設置され、国際児童図書評議会（IBBY）の推薦図書ほか、貴重資料も多く展示されます。お近くにいらしたさいは、ぜひ、お立ち寄りください。

引越し日は10月20日を予定しております。引越しの前後は、一時的に電話・ファックス・メールの対応が滞ることがございますので、ご了承ください。10月22日（月）の午後には、新事務所の電話、ファックス、インターネット環境が整う予定です。

●10月22日以降の住所

郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町1-32

出版クラブビル6階

TEL 03-5244-5270

FAX 03-5244-5271

（メールアドレスに変更はありません）



神保町駅のすぐ近くの出版クラブビルは、エントランスをくぐり、エスカレーターで上がると、書架に囲まれた受付ホールが迎えてくれます

事務局報告（8月）

- ☆1日 大震災出版対策本部運営委員会 に出席
- ☆3日 「読書週間」趣旨書「敬老の日読書のすすめ」リーフレット出来
- ☆6日 日本雑誌協会へ「読書週間」雑誌広告掲載案内をお願い
- ☆9日 機関紙「読書推進運動」609号データ入稿
- ・11日 「絵本ワールド・イン・ふくしま2018」（郡山市・ビッグパレットふくしま）に出席
- ☆10日 機関紙「読書推進運動」609号校了
- ☆15日 機関紙「読書推進運動」609号出来
- ☆17日 「第48回野間読書推進賞第1次選考事業委員会」開催。3個人10団体を選考
- ・18日 「日中韓子ども童話交流2018」開会式に出席
- ☆21日 「第72回読書週間」ポスターデザインについてイラストと打ち合わせ
- ☆22日 「第72回読書週間」ポスターを入稿
- ・22日 「上野の森親子ブックフェスタ」運営委員会に出席
- ・22日 文化産業信用組合広瀬常務理事に「上野の森親子ブックフェスタ2018」会計監査を依頼
- ☆24日 出版クラブビル竣工式に出席
- ・24日 文部科学省と来年度「子ども読書の日」ポスターの件打ち合わせ
- ・25日 第26期「J-PARC読書アドバイザー」養成講座「開講式」に出席
- ・27日 日本書籍出版協会中町専務理事に「上野の森親子ブックフェスタ2018」会計監査を依頼
- ☆28日 「第48回野間読書推進賞選考委員会」を開催
- ・29日 講談社社長室に出席
- ・30日 「上野の森親子ブックフェスタ2018」報告会に出席
- ☆31日 「第48回野間読書推進賞」贈呈式について出版クラブと打ち合わせ

編集部 & 事務局の ひとこと

●このたびの台風21号、および北海道で起きた地震で被害を受けられたみなさまへ、心よりお見舞いを申し上げます。

●8月、鹿児島に住む第一家が、やってきました。男の子がふたり、上の子が小学校5年生で、下が1年生。数年前は、「勉強イヤダー、本もイヤダー」と騒いでいたのですが、今年の夏は違いました。とくに、お兄ちゃんの方は、学校で習ったこと、新しく知ったことを一生懸命に私たちにも話してくれます。そんなお兄ちゃんのスーツケースに入れてきたのは、学校の宿題と『星の王子さま』（講談社青い鳥文庫）。私も小学生のときに、両親の本棚にある『星の王子さま』（岩波書店）を読んだっけ。母も、「おばあちゃんも昔、読んだのよ」とうれしそうでした。

●近所に住む弟のところには、女の子がひとり。こちらは3歳です。図書館では本より遊びに夢中ですが、家では絵本を自分で持ってくることも。先日、実家に集まったとき、絵本をプレゼントしたら大喜び。自分で一度、最後のページまでめくったあと、「お父さん、読んで」と弟に読み聞かせを催促！弟が、「ごく自然に、楽しそうに読んであげる姿を見てびっくり。お父さんの読み聞かせ、広がっているんですね。その後、『お母さん、読んで』『おばあちゃん、読んで』と続きました。私の父であるおじいちゃんには、声がかからず。元編集者のおじいちゃん、三輪車遊びやシャボン玉遊び専門で、絵本はノータッチのようです。（伸）